

Far From the Madding Crowd: 侵食される田園

内 藤 歆 修

Far From the Madding Crowd という、Thomas Gray の詩 *Elegy Written in a Country Churchyard* から題名を取った、この作品は Thomas Hardy の前期の優れた作品という評価が定着している。これは作者の言う *Novels of Character and Environment* (性格と環境の小説) の中の1つである。執筆開始前の作者の意図では 'a pastoral tale' (牧歌的物語) を書く積もりであった⁽¹⁾。これは、執筆の依頼をした、*Cornhill Magazine* 誌の編集者 Sir Leslie Stephen が *Under the Greenwood Tree* を大変に評価し、このような田園的な物語が自分の編集する雑誌の読者に好評を博するであろうという彼の考えに、作者が影響されたのが原因であろう。だが、いわゆる 'a pastoral tale' が単に田園やそこでの生活を称賛し、その対極にある都会やその生活よりも優れていると位置付けるものであるならば、Hardy のこの作品は辛うじてその気配が感じ取れる程度であって、真の 'a pastoral tale' とは言えない。*Far From the Madding Crowd* 中の田園は「都会的価値」に対立する「田園的価値」をもつ、現実的存在感を主張し得る場所的空間で、土の匂いから遠く離れて、郷愁を抱きながら夢想する空間ではない。

Far From the Madding Crowd の題名が示す the Madding Crowd は、小説の舞台の遠景に見え隠れする都会、都会的価値、都会的心性を表していると考えられる。この物語の舞台では、Gray の *Elegy* のイメージを下地にして、田園から遠く離れてはいるが、遠景として、昼間にはそのざわつきが微かに聞こえ、夜間にはその明かりの明滅が仄かに見えという存在である。また、舞台の中景には田園地帯とそこに先祖代々ずっと住み着いている土着の農民、Jan Coggan や Joseph Poorgrass などがいる。そして舞台の前景には、それぞれの農場で活躍する Oak, Bathsheba, Boldwood がいる。しかし、この3つの背景を背負う人々は、必ずしも常に自分の場だけを守り、そこに安住している訳ではない。自分の属する社会の殻を付けたまま互いに交わり、様々な事件を引き起こし、また遭遇していく。牧歌的な表題と外装の下、Oak と Bathsheba の関係を正面に据え、Bathsheba を巡って、William Boldwood と Sergeant Troy が平和な田園生活に波紋を投げかけて行くのである。そこに起こる諸々の「事件」は、普段は表に出ることなく、内在する登場人物の深層心理、内面的な心の動き、性格などを、本人が自覚する、しないに関わらず、はっきりと外に表し、読者の前に露呈する。これによって作者は新たな筋の展開を読者に余

り無理なく示そうという工夫をしている。

Gabriel Oak は 'pastoral' という語の意味が持つ基本的な属性を、正に具現していると言っても過言ではなかろう。しかし、その姿は見分けが付かないほど田園と同化して、没個性的な存在となっているのではない。彼は自然とともに呼吸し調和した生活をしてはいるが、時には自然の猛威に抵抗し対立して、自分の利益を守ろうとする。だが抵抗しながらも、自然界に学び、自然と妥協しその恵みを出来るだけ充分に享受しようと努力するのである。主人公 Oak がこれだけ自然に密着した生活をしているために、物語も季節の移り変わりとともに推移し、季節の行事や出来事が節目となって展開して行く。

Oak の住む場所は大自然の中にある。

The sky was clear — remarkably clear — and the twinkling of all the stars seemed to be but throbs of one body, timed by a common pulse. The North Star was directly in the wind's eye, and since evening the Bear had swung round it outwardly to the east, till he was now at a right angle with the meridian. A difference of colour in the stars — oftener read of than seen in England — was really perceptible here. The sovereign brilliancy of Sirius pierced the eye with a steely glitter, the star called Capella was yellow, Aldebaran and Betelgueux shone with a fiery red.

To persons standing alone on a hill during a clear midnight such as this, the roll of the world eastward is almost a palpable movement. The sensation may be caused by the panoramic glide of the stars past earthly objects, which is perceptible in a few minutes of stillness, or by the better outlook upon space that a hill affords, or by the wind, or by the solitude; but whatever be its origin the impression of riding along is vivid and abiding. (第2章)

1年のうちで1番昼の長い聖トマス祭前夜の真夜中に近い頃、彼がノークームの丘の上に立った時の付近の描写である。このパノラマ状に天空に広がって、見る者を圧倒し、自然の中に吸い込まれてしまう鎖覚を抱かせる光景の中で、人は人間を微小なものに見せ、かつ人間の生を包み込んでいる世界の存在を知るのである。しかも、人が不動のものと信じている大地である地球も、自転し、見る者の心に「乗って進んでいるという印象」(第2章)が強烈に迫ってくる。この観念はOakの視覚的体験を通して得られたもので、この中に彼の大地に根ざした根源的な生の在り方がはっきりと示されている。しかも作者はここで、語りの説明として、あたかも都市文明の批判のように、「この時刻のあらゆるこうした事物の進行に無関心な文明社会の、夢を貪る人間とは違うのだ」(第2章)という思いに、Oakが胸を膨らませると述べている。人間は自然や宇宙と比べると極めて微小なものであり、これらの前ではしばしば全く無力な存在でしかない。この考え方は、自然と接することが少なく、自らを比べる対象が同じ人間しかいない都会での生活では殆ど不可能に近い。自らを大自然の廣大無辺の存在と比べるのと、都会において互いに差のない同じ人間同士で比べ合うのでは、巨大な存在を知る者の方が、事物に対して畏敬の念を抱き、

宇宙の摂理にはずれない、より倫理的生活を営むことが出来ると言いたいのであろう。更に、Oak の場合、自然がもたらす災害に対しては極力戦う姿勢を示すが、その生き方の根底には一種の諦観が横たわっている。この時点では、大きな存在に対する無力感、諦観の気持ちは作者 Hardy の心の中で、後の作品に比べ、未だそれほど顕著な姿を表してはいない。そのため Oak は自然の猛威と戦いながらも、自然に学び、自然の恩恵をこうむって生活している。

このような生き方をする Oak にとっての時間も、人工的、観念的に時計によって計られる時間ではない。Oak の持っている時計は彼の祖父より数年古い、まるで置き時計のような大きさの懐中時計で、針のねじが緩んでいるらしく、分の単位しか分からない代物なので、彼は天体の運行をもとにして時の移り変わりを知るのである。このように天空は Oak にとって「有益な道具」であり、同時に「途方もなく美しい芸術品」であった。また今にも語りかけてきそうな静寂とした天空を見つめていると、人間の喜怒哀楽が消滅したように思えるのであった。ここでは他の動植物と同じように、人間も広大な宇宙空間の営みに包含される微小な一点でしかないと思われざるを得ない。

自然の一部とも見まごうべき Oak は、一目惚れした Bathsheba Everdene 故に、喜怒哀楽の世界に足を踏み込むことになる。「相好を崩すと耳元まで口が広がる御面相」で、「図体は大きいのに押し出しは貧弱」な上に、「恋の手練手管には縁のない性分」(第1章)とくときは、Bathsheba に結婚の申込みを受けてもらうなどというのは、先ず不可能というものである。彼女が美貌の上、才気煥発、並はずれての荒っぽい気性の持ち主とあっては、Oak のかなう敵ではない。彼女に言い負かされて、Oak は素直に引き下がって来たのである。その直後、作者は Oak に人生最大の試練を与えるのである。28歳の Oak は若さにかまけて、知性と感情を衝動という形で無分別にも混同する時期は終わり、両者が完全にはっきりと分かれる年齢に達していた。彼はそれまでの勤勉によって借金をしながらも、自ら250頭の羊を飼う牧場主に最近なっただけであった。未だ羊の代金は払っておらず、これから働いて経営の基礎を固めなければならない人生の大切な時期に、羊を管理するのを手伝っていた犬が、深追いし過ぎて白亜坑に追い落としてしまった。250頭中200頭の羊を失ってしまった Oak は茫然自失の状態に陥ったが、そこから目覚めた時の 'Thank god I am not married: what would *she* have done in the poverty coming upon me!' (第5章)という言葉が呪いではなく感謝であったのは彼の立派な人間性の現われであった。彼の愛他的精神、献身的愛、そして自制心などの心の強靱さ、精神の安定がよく現われた言葉である。

Far From the Madding Crowd の中で、Hardy は登場人物に幾つかの事件に遭遇させている。その都度彼らは、日常生活を営んでいる時には表面に表われることのない心の奥に潜む本性や性格などを無意識に、期せずして露呈してしまうのである。しかも、こうした劇的場面は、殆どが田園的な風景を巧みに脚色しながら、物語の中に組み込まれ、彼らの運命に大きな影響を与え、運命の分岐点としての役割を果たしている。偶然の出来事で、牧場主から裸一貫、無一文という奈

落の底にまで落ちてしまった Oak はこれを転機として、その後次々に起こる事件に立ち向かい、困難に打ち勝って行きながら、今まで見えにくかった、彼の鉦脈のような内的な価値を少しずつ読者の前に示して行くことになる。農業や牧畜の仕事のために培ってきた彼の知識は同時に自然との共存を可能にする知恵ともなり、ただ単に実生活上の技術に留まらず、揺るぎない人生観、生きて行く基本的態度にまで高まっているのである。そして、これらのものが彼の感情、意志、行動の3つの面を調和させ律している。大自然から学んだ人生観と仕事の技術は彼が試練に堪え抜き、どん底の生活状態から徐々に這い上がって行くのに大いなる助けとなっている。

無一文になってしまった Oak はカスターブリッジの雇人市で空しく雇い主を探した日の夕刻、稲積みが火事になっているのを見つけた。持ち前の愛他精神を発揮し、一人大活躍をして火を消し止め、偶然、今はそこの農場主となっていた Bathsheba に雇ってもらう。その後 Boldwood との結婚を Oak に相談して、その軽薄な悪ふざけを咎められた Bathsheba は、彼を解雇してしまうが、彼は全く動じない。その翌日 Bathsheba の羊がクローバーの若葉を食べ、体内に毒ガスを発生させてしまい、死にそうになる。これを助けることができるのは近隣には Oak しかいないということが分かり、Bathsheba は急いで彼に助けを求める。Oak は最初の Bathsheba の命令口調の頼みは拒絶するが、2度目の哀願するような頼みまでは断れない。

勿論これには Bathsheba に対する恋心が多く作用しているのであろうが、Oak の自分の技術への自信と生き物への愛情がなければ、このような落ち着いた、タイミングを外さない行動は取れないであろう。そして彼は実際に苦しむ羊の手術を見事にやりとげた。腕一本で羊を救い、Bathsheba に譲歩させ、自らの地歩を固めたのである。

Oak の Bathsheba に対する献身的態度は、彼女が Troy と結婚しても変わることはない。八月の末、Bathsheba と Troy は作男たちを集めて収穫の祝いを開く。Oak もそれに参加したが、Troy の度の外れた祝宴にはなじめず途中で辞退する。Troy は Bathsheba の止めるのを振り切って、ますます作男たちに強い酒を勧める。酒宴では女たちを追い出した男たちが酒盛に忙しかった。Oak が戸外に出てみると、至る所に嵐を告げる兆候が現われていた。薄黄色一色に包まれた野面、怪しい空模様に脅える羊が見え、戸口近くでは墓に躓き、家の中ではいつもは庭にいるなめくじが室内に現われ、食卓の上に鈍色の光沢を帯状に残している。これらの現象は全て、Oak が自然から学び、教えられた知識によると、嵐の到来を予知させるものであった。暴風の到来を仲間たちに知らせようと屋敷に行き酒席を見ると誰一人役に立つ者はいなかった。Troy を始め皆泥酔して眠りこけている。恋しい Bathsheba のために Oak は自分一人で収穫した麦を救うことを決意し、作業に取りかかる。自然の申し子のような Oak と自然の人間に対する猛威との必死の戦いである。Oak が麦の山を守るべく応急処置を施している間にも、稲妻がよぎり雷が鳴り響く。自然が地上に牙をむき、襲いかかって来るなか、一人 Oak が麦山相手に奮闘している時、異変を知って Bathsheba が駆け付ける。Bathsheba は Oak の手助けをし、稲妻が麦山をマジョル

カ焼きのように輝かせる最中、二人は夢中になって作業を続けた。危険を感じて Oak が Bathsheba の腕を掴んだ時だった。

Heaven opened then, indeed. The flash was almost too novel for its inexpressibly dangerous nature to be at once realized, and they could only comprehend the magnificence of its beauty. It sprang from east, west, north, south, and was a perfect dance of death. The forms of skeletons appeared in the air, shaped with blue fire for bones — dancing, leaping, striding, racing around, and mingling altogether in unparalleled confusion. With these were intertwined undulating snakes of green, and behind these was a broad mass of lesser light. Simultaneously came from every part of the tumbling sky what may be called a shout; since, though no shout ever came near it, it was more of the nature of a shout than of anything else earthly. In the meantime one of the grisly forms had alighted upon the point of Gabriel's rod, to run invisibly down it, down the chain, and into the earth. Gabriel was almost blinded, and he could feel Bathsheba's warm arm tremble in his hand — a sensation novel and thrilling enough; but love, life, everything human, seemed small and trifling in such close juxtaposition with an infuriated universe. (第37章)

大自然の猛り狂う力に翻弄され、その脅威の中で微小な存在である人間の男女が身を寄せ合い、一瞬の間だけの肉感的な興奮に捕われる。しかし、人力の及ばない自然の中の、極限状態での一瞬の時は、平常時における永遠に続く時間に等しい強い印象を Bathsheba に与え、二人の魂は何の障壁もなく寄り添うことが出来たのであろう。この直後に、このような荒天にも拘わらず、Bathsheba はバースまで馬車をとばして Troy を追いかけて行き、結婚して帰って来たことについて Oak に説明する。Bathsheba は Oak に少しでもよく思われたい一心でこのような告白じみた説明をした後、「貴方の献身振りにはいくらお礼を言っても言い尽せないわ。……私の為に最前を尽してくれていることは、百も承知なのよ」(第37章) と言って去って行く。結婚の申し込みを拒絶された男 Oak の、大嵐の中での献身的な働きと、嫉妬心かられ錯乱状態に陥った結果とはいえ、自分から結婚を承諾した相手である Troy の、このような緊急時においてすら泥酔して、眠りこけている姿を見比べれば、如何に自尊心の強い Bathsheba でも、この二人の男の価値の相異から目をそらすわけにはいかないであろう。だが麦山に防水布を掛けて守り、即席の避雷針を作り落雷から身を守るという Oak の働きは、Troy の無責任さや悪徳を際立たせ、Oak の自然の法則に則った目覚ましい行動や美徳を単に倫理的に称揚するという目的で描かれているのではなく、平素から自然を友としそれに学んできた者が、天の災害に対しては、自らを守ろうと誠実に自分の義務に従っている姿として、やや理想的に描かれているのである。それ故、読者は作者の意図通りに、Bathsheba が Oak に多大な信頼と感謝の念を抱くのに無理なく同感するのである。

Oak の人となりだが、純粋に田園的心性を表すものならば、Bathsheba Everdene は半ば田園的、半ば都会的な心性の持ち主として登場する。馭者に一人残された馬車の上で Bathsheba が、他人

に見られているとも知らずに、何気ない無意識的な行動を取る。

The handsome girl waited for some time idly in her place, and the only sound heard in the stillness was the hopping of the canary up and down the perches of its prison. Then she looked attentively downwards. It was not at the bird, nor at the cat; it was at an oblong package tied in paper, and lying between them. She turned her head to learn if the waggoner were coming. He was not yet in sight; and her eyes crept back to the package, her thoughts seeming to run upon what was inside it. At length she drew the article into her lap, and untied the paper covering; a small swing looking-glass was disclosed, in which she proceeded to survey herself attentively. She parted her lips and smiled.

It was a fine morning, and the sun lighted up to a scarlet glow the crimson jacket she wore, and painted a soft lustre upon her bright face and dark hair. The myrtles, geraniums, and cactuses packed around her were fresh and green, and at such a leafless season they invested the whole concern of horses, waggon, furniture, and girl with a peculiar vernal charm. What possessed her to indulge in such a performance in the sight of the sparrows, blackbirds, and unperceived farmer who were alone its spectators, — whether the smile began as a factitious one, to test her capacity in that art, — nobody knows; it ended certainly in a real smile. She blushed at herself, and seeing her reflection blush, blushed the more. (第1章)

冬至に近いこの晴れた日に、周囲の明るい雰囲気に合わせて、彼女の姿に早春の魅力が重ね合わされている。その早春の趣に包まれて、Bathshebaは若さから来る性的な無邪気さを示している。鏡の中でにっこり笑った行為は、意識的にせよ無意識的にせよ、自分の性的魅力を十分に意識している者の仕草であろう。このナルシスティックな自負の気持ちを抱いて彼女は農場経営の世界に入って行く。

OakがBathshebaに結婚を申し込みに行った時、伯母のMrs Hurstは彼女のことを、器量よしで、教師になろうとしたこともあるほど学があるが、ただ荒っぽ過ぎると評する(第4章)。Bathshebaのこれらの属性を作者は彼女本人の行動で具体的に示してみせる。第3章で、Bathshebaは馬に乗っている時、またもやOakが垣間見ているのも気付かず、周りに人が誰もいないのを見計らって、前方に頭上低く木の枝が交差している所を、馬の背に仰向けになって通り抜ける。「カワセミのように素早く、鷹のように静かに」この姿勢を取ったのであった。この行為は自然との緊密な結び付きを表し、Bathshebaの荒っぽい田舎娘としての面目躍如たるものがある。

BathshebaはOakの求婚を持ち前の頭の回転の良さで、彼を半ば煙に巻きながら断ってしまう。彼女にとって結婚は戦いで勝利を収めるようなことなので、素晴らしいものだが、夫は不要なものである。「夫を持たずに花嫁になれるのなら、結婚式の花嫁になってもいい」が、性格が勝負過ぎるので、自分の必要としているのは「飼い慣らしてくれる人」である。だが、彼にはそれが出来ないと言って、申し込みを断る(第4章)。その上、金持ちの女と結婚すれば、より大きい牧場が持てるなどと言って、Oakを納得させてしまう。これらのBathshebaの言動は物語の進展

を辿って行くと大変暗示的である。Troy と結婚しても、法律上の結婚期間の殆ど大半の間、彼は彼女にとって夫らしい振る舞いをしなかった。そして、彼女はこれから先、その人間性に大きな影響を与えるほどの数多くの苦難を経験し、「飼い馴ら」されたように荒っぽさが目立たなくなって行き、しかも Oak と結婚することによって彼をより大きな農場主にするのである。しかし、現時点では Bathsheba は将来の自分の姿を知る由もない。そして間もなく、Oak の運が傾いたのと時を同じくして、Bathsheba の方は盛運に向かう。Oak は没落し一介の浮浪者同然の身となり、一方 Bathsheba はウェザベリーの農場を伯父から譲り受け農場経営者となる。

Bathsheba は自分の美貌に対して、男たちに無意識にいわば貢ぎ物を要求している。その Bathsheba に、惚れた弱みと根っからの善良さのために献身的に尽すのは Oak である。前述のように Bathsheba の気まぐれのために振り回されるのだが、Oak は彼女の利益を第一に考え、陰に陽に出来るだけのことをして誠を尽す。Oak は求婚の時の言葉「あなたを愛し、慕い、死ぬ日まで求め続ける」(第4章)という気持ちを決して忘れず、Bathsheba を諦めることをしない。彼女はこのことをよく分かっていて Oak に献身を要求し続けるのである。

Bathsheba の気まぐれは、一人の善良な男性を破滅させてしまうようないたづらをする。作者はこのいたづらで彼女の美貌が如何に男性の心を動かすほどのものかをここで示している。村一番の紳士で静かな身のこなしをした、地主 William Boldwood が自分に興味を示さないという理由で、ヴァレンタインの日に「私と結婚して」という封蝋とともにカードを送った。自分の美貌をことのはか意識している Bathsheba は、Boldwood がカスターブリッジの穀物市場で、彼女に優る者なしという賛美の意を表さなかった時の悔しさとも悲しさとも言えない気持ちを忘れてはいない。その時の彼の態度を見て、自分が気分を害したと思われぬように、Liddy に彼のことを「私のことで時間を浪費しない分別のある男」と評したが、後になってこの「分別のある」はずの Boldwood が分別を無くして彼女を巻き込む悲劇を演じるとは、この時の Bathsheba は夢にも考えていない。自尊心を傷付けられて半分いたづら心から、半分腹立ち紛れに、威厳があり、分別盛りであるはずの41歳になる中年紳士 Boldwood へカードを送る際、未だ人生経験も浅い、若い娘の Bathsheba に、その内容がどう受け取られるか良く考えるように要求するのは酷である。この Bathsheba の魔がさしたとしか言えないような行為が彼女の運命に大きく影響を与えるのも、ふとした偶然のために人が大きな影響をこうむり、悲劇に巻き込まれて行くという Hardy の宿命的な考え方に支配されている。

カードの効果はてきめんに見られる。だが暫くは Boldwood の心の中を乱すだけであった。しかし、Boldwood はとうとう五月のある日恋い焦がれる思いを告白し、求婚するために、使用人たちの羊洗いを監督している Bathsheba のもとにやって来た。彼女は Oak の申し出を断った時のように「私はあなたを愛していません」と言って、Boldwood の求婚を断ろうとする。Bathsheba は「愛する」という感情の上では無条件に Boldwood を拒否してはいるが、理性では彼の

申し込みを断るべきではないことを知っていた。彼の求婚の直後に、「結婚の手段としての Boldwood は正に理想的な人物で、彼女は彼を尊敬し好きでもあるが、彼を手に入れたいとは思わない」(第20章)と理性と感情の相剋が彼女の心の中で生じる。妻が夫を愛するように Boldwood を愛せないという Bathsheba の考えにはかなり官能的な要素が入り込んでいる。Bathsheba にとって生物界で雌が雄に惹かれるような要素を Boldwood は殆ど持っていない。Boldwood の申し出は彼女及びそれ以上の良縁の娘でも喜んで受け入れ、世間に誇り得るものであったが、謹みと誠意を持った彼の態度は彼女を魅惑し、「飼い馴らす」ようなものではなかったため、Bathsheba は一も二も無く求婚を拒絶したいと思う。しかし、自分の蒔いた種なので、即座には拒否出来ず態度を曖昧にしておいた。Boldwood は熱に浮かされたように、Bathsheba に纏い付くことを止めず、毛刈りの宴の時に再度求婚する。Bathsheba は追い詰められ、Boldwood が五、六週間当地を不在にした後戻って来るまでに決心すると返事をする。そしてこの夜 Bathsheba が出会ったのが、Sergeant Troy であった。

Troy は都会的な雰囲気を漂わせ、お世辞の連続で Bathsheba の牙を悉く抜き去ってしまう伊達男であった。Troy の拍車が Bathsheba のスカートに絡まってしまい、二人は取ろうとして努力した。Bathsheba は本気で腹を立てながら引っ張って引き離そうとしたが、Troy はこの状況を喜んでその時間を延ばそうとしていたのである。蜘蛛が糸で獲物を絡め取るように、Troy は Bathsheba の美貌を褒め上げ、抵抗力を奪ってしまった。Bathsheba は腹を立てながらも、彼に惹かれて行く。彼女は征服され、君臨されたいという内面的欲求を満たしてくれる者が現われたことを知る。この残酷な傾向のある Troy は、田舎生活でまどろんでいる状態だった Bathsheba の感情を目覚めさせたのである。彼女は自分の気まぐれに抵抗してくれる男を無意識のうちに求めていた。これまで求愛した Oak も Boldwood も誠実に紳士的に Bathsheba に対応して来たが、勝ち気な彼女は立派な学校教育を受け、しかもその場その場を巧みに切り抜けて来たという自負もあって、この二人では大層物足りなく見えた。この誇り高い Bathsheba が惹かれたのは手なづけてくれる人を不誠実なおべっか使いの Troy に見たからである。Oak と Boldwood は Bathsheba に畏怖の念を抱き厳正な距離を置いて、彼女が愛をかなえてくれるのを従順に待ち続けているのだが、彼女はそんな事に頓着せず、傲慢な態度を取り続けている。Oak は第4章で Bathsheba の出現を待つのがまるで犬が食事を待つ様子に似ているので惨めな気持ちになるほどであると感じている。

Bathsheba に畏敬の念を起こさせるには、余りにも控え目な Oak の愛に比べ、Troy の彼女に対する攻勢は目覚ましく、その態度は Oak と Boldwood にとっては不作法であり度を越した振る舞いとしか思われぬ。Troy は拍車を外そうとしながら、初対面ですうすうしくも彼女の手に触れる。Bathsheba は彼女の容貌に賛辞を惜しまない Troy の中に激しい気性を見て取り虜になってしまう。Troy の魅力は Oak と Boldwood の地味で控え目で微温的な態度には見られないもの

で、Bathshebaの心を強く動かした。

Bathshebaの心を決定的にしたのは、*Far From the Madding Crowd*の中で最も印象的で官能的でさえある、Troyの真剣の舞いの場面である。黄金色を発散する西空の太陽の豊かな光線を浴び、羊歯の葉が取り囲む空き地の中で、真紅の軍服を身に付けたTroyは目も眩むような剣の腕前を披露する。Bathshebaを仮想の敵として剣の切っ先を悉く彼女に向け、度肝を抜き魅了する。Troyの剣は彼女の官能に直接に攻撃を加え、情熱の目を突然に覚ましたのである。それまで冷静であったBathshebaは心を完全に転倒させ、抵抗出来ない状態に陥ってしまう。Troyの剣の妙技でBathshebaは心の壁を取り払われ、彼の前で無防備になってしまった。その虚を突かれ気が付くと、Troyに優しくキスされてしまっていた。この間、Bathshebaは全く思慮分別が圧倒されてしまうほど、感情が膨れ上がり、知らず知らずのうちに涙を流していた。Troyの女蕩し的なお世辞に戸惑い、彼の肉体的魅力と都会的振る舞いに引き付けられながらも、これまで辛うじて勝っていた理性がここに至って官能の波に襲われ、感情に押し流され、彼に対して無抵抗の状態になってしまった。Bathshebaの「女性」が目を覚まし、理性が感情に席を譲り、そして彼女の運命が大きく変わった瞬間であった。この剣の舞いは単にTroyの剣の妙技の披露だけではなく、Bathshebaの心の鎧を破壊し、裸の心に攻撃を仕掛け、彼女の理性を打ち負かし、官能に火を付けたという点でも、象徴的意義を示している。

We now see the element of folly distinctly mingling with the many varying particulars which made up the character of Bathsheba Everdene. It was almost foreign to her intrinsic nature. Introduced as lymph on the dart of Eros it eventually permeated and coloured her whole constitution. Bathsheba, though she had too much understanding to be entirely governed by her womanliness, had too much womanliness to use her understanding to the best advantage. Perhaps in no minor point does woman astonish her helpmate more than in the strange power she possesses of believing cajoleries that she knows to be false — except, indeed, in that of being utterly sceptical on strictures that she knows to be true.

Bathsheba loved Troy in the way that only self-reliant women love when they abandon their self-reliance. When a strong woman recklessly throws away her strength she is worse than a weak woman who has never had any strength to throw away. One source of her inadequacy is the novelty of the occasion. She has never had practice in making the best of such a condition. Weakness is doubly weak by being new. (第29章)

このBathshebaの「愚の要素」は二番目の求婚者Boldwoodに指摘されている。Troyは出会ったその日にBathshebaの手に触れ、三、四回会っただけでキスまでしている。「あなたの手に触れるためなら、この世のもの全てを投げ打っても良かったのだ。あなたは正当な筋道も踏まず式も挙げないうちから、あの悪党を心の中に引き入れて、キスを許したのだ」(第31章)というBoldwoodの非難は正しい。行動を起こした結果生じて来る様々な事柄を注意深く考慮して自分

の気持ちを抑制せず、「他の人たちに険しい荆の道を示しながら、自分は自らの戒めをなおざり」にした Bathsheba には、「思慮分別よりは衝動の方が遥かに楽しい案内者に思われ」（第29章）、「理性」と「女らしさ」、即ち「精神」と「肉体」の狭間に立ち悩む彼女は自立心をかなぐり捨てて Troy にのめり込んで行った。この時にはもう、Bathsheba は愚かにも、鉱山に埋まっている金属さながらに美点が全然見えない Oak などは全く眼中になく、欠点が彼女の目に届かない奥深い所に潜んでおり、上辺の立派な部分だけが目立っている」（第29章）Troy にだけしか目が行かなかった。上の引用文にあるように、「愚の要素」がエロスの放った矢に塗られ、リンパ液として注入され、Bathsheba の全身に滲透して行った。このため恋という「循環器の病気」に罹ってしまった Bathsheba は、第30章では Troy に送られて帰宅した時、「蠟燭に照らされた彼女の顔は、今では慢性化している紅潮と興奮に燃えていた」とこの病気はますます重くなって行く。

この後 Troy との結婚に破れるまで Bathsheba は「肉体」と「精神」、「官能」と「意志」、あるいは「感情」と「理性」との相剋に苦悩し、その間を揺れ動くことになる。しかも常に「肉体」「官能」「感情」の側が「精神」「意志」「理性」に勝利を収め、Bathsheba は Troy の肉体の魅力に惹かれ、あたかも蜘蛛の糸に絡み捕えられ身動き出来ないというようになり、彼の手中に落ち、結婚をする。

だが、その前に Troy から身を引く決心をし、深夜馬泥棒と間違われるような突飛な行動に出て、バースに馬を走らせる Bathsheba の胸中には「Troy と Boldwood が入れ替わっていて、恋の道と義務の道を同時に果たせるなら、どれほどか幸福な生活が送れるのに」（第32章）という思いが去来していた。ここでは当然「恋の道」＝感情のままに行動する道、「義務の道」＝理性的な道であろう。即ち、理性の上では、Boldwood の方が良き伴侶となることが分かっているが、感情は Troy の魅力に惹かれる Bathsheba の内面的矛盾がここに鋭く分析されている。作者は更に、「恋人の助けというものは、その当人と手を切る決心を助けてくれるには最も不適切であるとの明白な事実」、Bathsheba は全然思い至らなかったのか」（第32章）と疑問を呈しているが、この言葉は恋に盲目になった Bathsheba の行動は彼女自身の判断に基づいているので他の者には如何ともしがたいことを示している。Hardy の考えでは、「肉体」や「感情」は主人公たちの意のままにコントロール出来るほど生易しいものではない。Bathsheba と Troy の結婚は彼女の「感情」が「理性」を打ち負かした結果である。

この二人の結婚は長くは続かない。Bathsheba の田舎人たる農業経営者としての生き方と、都会人たる Troy の、非日常的な世界の代表者のような軍人の生き方とでは所詮歯車が合うわけがない。そして元々 Bathsheba が幻惑されたのは、色彩と光と音の作り出す極めて非現実的な世界を演出した、あの剣の舞いの時であった。大地に足をつけた最も現実的な仕事に携わっている Bathsheba が非現実的な場面で非現実的な場所に属している男に魅入られ、抵抗力をなくして結婚したのである。無分別な Troy に無抵抗に自分を引き渡してしまったのである。

この夢うつつの状態から現実に戻ると、次第に Troy の真の姿が見えて来る。第35章で二人が結婚したことが示されるが、次の第36章ではもう二人の前途に影を差す暗雲を暗示する嵐の前兆が出現する。嵐の場面では前述のように、自然の猛威を示す嵐と戦い収穫物を守るという現実的経験を通し、Bathsheba は Oak の偉大さと誠実さを再認識し、夫である Troy の非現実性、実生活上での無能さ、弱点を見せ付けられる。その上、軍隊を除隊して、妻の財産で派手な、好き勝手な生活を始めた Troy に対して、Bathsheba は競馬のことで干渉するという諍いが起こる。飽くまで自由の身と享楽が信条の Troy にとって、この Bathsheba の干渉は我慢のならないことであった。夫婦の間で金銭の問題に端を発した不穏な空気は、Troy の前の恋人 Fanny の出現によって急速に悪化する。

男勝りの Bathsheba も個人的な生活に関して他人から干渉されることは許さない。例え自分から意見を聞いた相手に対してでも、批判じみたことを言われると、前後の見境なく烈火の如く怒る。ヴァレンタインデー・カードを面白半分に Boldwood に送り、彼に付き纏われて困り、Oak に相談した時、Oak が「あれは考え深くて優しく、美しいご婦人のやることではありません」(第20章)と言うと、カッと成り「私は誰だって許さないわ—私の個人的な行動をとやかく言うなんて」と激怒する。そして、即刻彼をクビにしてしまうのである。心の中では、「自分のことや行為について、自分の意見よりも堅実だと思っているただ一つの意見は Oak の意見」(20章)だと分かっているのに、このような態度に出るのは Bathsheba の人生経験の未熟さと衝動的な性格の結果であろう。Oak が Bathsheba の行動を諫めて、彼女の怒りをかうのは Troy に対してもっと慎重になるよう忠告した時も同じであった。彼女は再び同じ轍を踏んで、「どこかへ行って欲しい」と命令口調で言うが、今度は Bathsheba のことを心配する Oak がうまく収めて事無きを得た(第29章)。Bathsheba のこの態度はどんな場合でも変わらない。例の大嵐の場面でさえ、麦山を守るために Oak が必死に献身的な作業をしている最中にでさえ、問わず語りに自分から Troy との結婚の顛末を説明しておいて、Oak がろくに返事もしないのに、「今更、この問題については、あなたから、一つの文句も付けて欲しくないの—本当よ、とやかく言わさないわ」と突っ張って言う(第37章)。Oak に助けてもらっており、しかも彼によく思ってもらいたいと考えている時の言葉である。才気煥発ではあるが、私生活に関しては、他人の立場に立って考え、自分と自分の置かれた状況をより深い観点から客観的に見るというようなことが少なく、自己中心的な考えに留まり勝ちな Bathsheba に、夫 Troy の前の恋人 Fanny が死んだ時、大きな試練が襲いかかる。懊悩しながら Bathsheba は Oak の助言を求めている。

She suddenly felt a longing to speak to some one stronger than herself, and so get strength to sustain her surmised position with dignity and her carking doubts with stoicism. Where could she find such a friend? nowhere in the house. She was by far the coolest of the women under her roof. Patience and suspension of judgment for a few hours were what she wanted to learn,

and there was nobody to teach her. Might she but go to Gabriel Oak! — but that could not be. What a way Oak had, she thought, of enduring things. Boldwood, who seemed so much deeper and higher and stronger in feeling than Gabriel, had not yet learnt, any more than she herself, the simple lesson which Oak showed a mastery of by every turn and look he gave — that among the multitude of interests by which he was surrounded, those which affected his personal well-being were not the most absorbing and important in his eyes. Oak meditatively looked upon the horizon of circumstances without any special regard to his own standpoint in the midst. That was how she would wish to be. (第43章)

人生の危機に直面して、Bathsheba は生の深淵を覗き込んでいるこの時に内省的になり、他人に対して徐々に正しい評価の目を向けるようになって来た。そして Oak の高い志操、達観した人生観を理解するに従って、今までのようには気軽に彼の助言を仰げなくなっている自分に気付くのである。ためらった挙げ句 Oak には相談出来ず、ただ彼の小さな家の周辺を歩き回り、その家に漂う満ち足りた雰囲気慰められ魅了されるのであった。彼の静かな慎み深い、諦観的ですらある生活態度と、Bathsheba の今の反抗的で苛立っている気持ちとの対照的な姿に彼女は堪えられなかったのである。狂気の世界に身を置きながら Bathsheba は自らを客体視することが出来るようになっていた。

Bathsheba をこのような苦悩の中に陥れたのは Fanny の出現に伴う夫婦生活の危機であった。もう既にこの頃の二人の間には秋風が立っており、Troy にとって今や、妻は単に金のなる木であり、馴らし尽してしまった魅力のない女となり、自分の自由を縛る邪魔な存在としか目に映らなくなってしまっていた。Fanny との再会が Troy の気持ちを再び彼女の方に傾けさせた。Bathsheba が自分のロマンスへの未練を口にすると Troy は一言のもとに彼女の気持ちをはねつける。彼には最早 Fanny への思いしかなかった。Troy の気持ちが自分から別の女へ移って行ってしまったのを知った Bathsheba は、嫉妬心にさいなまれ、心をひどく動揺させて、自尊心が粉々に打ち砕かれてしまう。かつての自尊心の強い、自信に満ちていた彼女は、大した価値のない男への恋心に引きずられて屈辱を味わうのである。軽率な結婚のために自分から招いてしまった境遇の痛ましさに心が混乱する。軽蔑すべき浮気な放蕩者と結婚したために、自分が汚され、辱められ、その犠牲になってしまったと思う。Bathsheba は若い頃、平凡な結婚で純真な乙女の生活を捨てるのは墮落であると考えていたのに、実際には自分の面目を失墜させるような男を夫に選んでしまったのである。男に馴らされ、征服されたいという Bathsheba の内面的欲求を実際に満たすことの出来るのは、この残酷な傾向のある Troy の性格を除いて外にない。このような男に Bathsheba は我が身を無抵抗にも引き渡してしまった。深い後悔の念をもって、Troy を知る前の自分に返ることが出来たらと願う。

またもや作者 Hardy の紡ぎ出す「偶然」という糸は、Fanny の遺骸を Bathsheba の家に運び入れる。更に Troy と Bathsheba の二人を柩の前にまで手操りよせた。無言の Fanny の姿は

Bathsheba に彼女と Troy の関係を雄弁に語りかけて来た。自分は Troy と子供をなすまでの仲であったと。しかも夫の Troy は Bathsheba を無視して、悔恨の情と敬虔の念をもって、優しく Fanny に接吻したのである。その時、高慢で勝気な、気位の高い Bathsheba は我を忘れて取り乱した。夫のそのような姿を見るに堪えず、Troy に飛び掛って、「その人にキスしないで！ あの娘より私の方があなたを愛しているわ。私にもキスして」（第43章）と狂気のように叫ぶ。それは彼女の総ての強い感情が一つに凝縮し、衝動となって爆発したように見えた。衝動的に結婚してしまった自分の愚かさを何度も後悔した挙げ句、夫が別の女性に接吻するのを目の当たりにして、突如として見せる激情の迸りであった。Troy の浪費癖に臍を噛む思いをしながら、なお他の女性を愛する彼に堪え切れず、自分を愛して欲しいと誇りも自尊心をもかなぐり捨てて泣き叫ぶ、この Bathsheba の姿は、感情と理性、肉体と精神の相剋に対する苦悩を如実に示している。彼女の心の内部では Troy への憎しみと愛が激しく交差し、感情が理性を押し潰そうとしているように思われる。

苦悩に身を裂かれるような狂乱状態の Bathsheba の哀訴に対して、Troy はただ粗暴な言葉と沈黙を命じる横柄な目付きで「君にはキスをしないよ」と彼女を押し退ける。Bathsheba の「この私は一体何なの」と言う言葉に対して、Troy は「お前はおれにとって何でもないんだ。無に等しい人間だ。牧師の前で式を挙げて、本当の結婚なんかであるものか。おれは、事実上お前の夫なんかじゃあない」（第43章）と言い放って、Bathsheba を絶望の淵に落とす。この現代でも充分通用する結婚についての重い問題提起は Hardy の作品の持つ普遍性を示す好例であろう。Hardy の結婚に対する本能的な恐怖感や嫌悪感は後の *The Mayor of Casterbridge* や *Jude the Obscure* で更に重い問題として現われるが、*Far From the Madding Crowd* ではこれ以上大きく扱われることなく、Bathsheba 個人の問題として収斂して行く。いずれにしても Bathsheba の受けた衝撃は大きいもので、精神的には Troy との結婚生活は破局を迎えた。

Fanny はその性格故に生前には、物語の中で影が薄い。彼女の対極には Bathsheba がいる。Bathsheba は才気走った、自立心の強い女性で、思い切りのよい決然とした所があるが、Fanny は子供じみて、ひ弱な小心な娘で、人目に立つことがなかった。Fanny は意志を貫徹しようという断固とした所がないので、Troy にその弱みに付け込まれてしまう。結婚の約束を真に受けて、Troy と深い関係になり意のままに動かされる。彼女の哀願で Troy は結婚すべく教会に赴くが、彼女は些細な間違いで別の教会へ行ってしまう、Troy に恥をかかせた上結婚も出来ない。彼女は Troy の怒りを恐れて、再び約束を履行するには要求出来ず、彼の前から姿を消してしまう。

しかし、この内気な Fanny の死の寸前の姿は読者の感動を誘うものである。カスターブリッジの街道をカスターブリッジ救貧院に向かって、Fanny は出産間近の陣痛を覚えながら、身を引くようにとぼとぼ歩いて行く（第40章）。疲労困憊し、激しい体力の消耗の末、身体的衰弱

が限界状態に至っても尚、明後日 Troy に会うことを期待し、生きる希望を失わずに全精力を出し切って必死の思いで救貧院に辿り着こうとする。作者の目は恰もテレビカメラのレンズのように Fanny の動きを正確に追って行く。Fanny は名前では呼ばれることなく、「この女」、「歩いて来た女」、「旅の女」などと客観視されている。作者は彼女を単なる平凡な田舎娘の域から、人間の普遍的存在にまで高め、彼女の生と死の中により深い意味を見ようとしている。途中で Fanny が先に進むのを助け救貧院まで一緒に行く宿なし犬も象徴的な存在である。Fanny の生きようという気力が具体的な姿を取って現われたように見える。この場面は作者の隣愍の情を大いに動かし、力強い筆致で描かれている。この犬と彼女の関係は超現実的な叙事詩の性質を帯びて行く。この犬は救貧院の中に Fanny が助け入れられるまで彼女を守り、その男に石を以て追われ姿を消す。Fanny の何とか生きようという命の最後の灯を象徴するこの犬が去った後、Fanny の命も暫くして消えて行った。

Fanny は死んでからその存在を大きくする不思議な役割を果たす。生前中は殆ど誰にも影響を与えることはなかったが、死んだ途端不実だった Troy に隣愍の情を催させ、彼の心を愛情で一杯にした。作者の言うように「(Fanny と Bathsheba の) 巡り合いは、この死んだ娘の失敗を成功に、屈辱を勝利に、不運を優勢に逆転させたのであった」(第43章)。Fanny は死によって初めて事件の核心に足を踏み入れた。柩の側で Troy と Fanny の過去が明かになり、Troy の気持ち完全に Bathsheba から離れ、二人の激しい言い合いの末 Troy が出奔することになったからである。

Bathsheba がこの悲劇的な事件から受けた心の傷と肉体的消耗を癒すのに無意識に逃げて行ったのは、カシヤブナの茂る森の入り口のシダの草むらであった。この自然が作り出したベッドで眠り、翌朝心身共に回復して目覚めた Bathsheba は、悪夢のようだった Troy とのロマンスからも目覚めるのである。彼女は柩の中に横たわっている Fanny の死顔を凝視しながら、「最悪のことでも知ることが最善なんだわ、今、そのことが分かったわ！」(第43章)と言う。ここで、夢想的なロマンスから脱却して、Bathsheba は夢や幻想に身を任すことのない、現実を直視出来る女性に成長したのである。Troy に魅了され、誘惑され、そして捨てられるという過程は、即ち Bathsheba の現実を認識する過程であった。自らの無知から、強烈なロマンスを期待した結婚であったが、Troy との生活という現実に破れてしまったのである。これは Oak との愛に目覚めるために必要な試練である。この愛の成就是詩篇の祈禱書の一節「おお主よ、われに与え給え、お恵みを」を暗唱する少年のこの場面への登場に暗示されている。しかし、Bathsheba の覚醒というテーマはここで終わるのではない。それには彼女は Troy の死という悲劇的な破局を経験しなければならない。

Troy の出奔後、再婚の望みが出て来て、ますます Bathsheba に夢中になっていた Boldwood は何とかして彼女との結婚の約束を取付けようと躍起になり、色々と彼女に言い寄る。その結果

が、クリスマス・パーティでの Boldwood による Troy 射殺事件となる。Bathsheba はこれまでに Boldwood に対するヴァレンタインの日のいたずらという愚行の種から育ったものを如何にすれば刈り取ることが出来るかに悩み抜き、一方、夫 Troy との間の性愛的な未練も絶ち切れず、ずっと精神的に不安定であった。そして自分の進むべき道をはっきり見つけ出し得ないでいたのである。だが、ここで Troy が死亡し、Boldwood が刑務所に自首する。二人とも Bathsheba の目の前から永久に姿を消すことになる。ここに至るまで作者は、第52章を七つの場面に分け、第53章とともに、刻々と時間を追いつつ、Bathsheba, Boldwood, Troy の行動や心理を交互に描きながら、その破局に到る様子をドラマティックに展開して行く。

Bathsheba の苦しみと重荷になっていた二人はこうして一挙に物語の舞台から姿を消してしまう。彼女は我が身の愚かさを心の底から悟り、真の意味での改悟の念に達する。自分の未熟さ、愚かさが原因で二人の人間を破滅させてしまったのである。この事件の強烈な衝撃は Fanny の死によって受けた衝撃の比ではなかった。人生最大の危機が Bathsheba を襲ったのである。それは今までの彼女の自我の全面的否定であり、敗北宣言であった。ここに Bathsheba は真の精神的危機に直面した。

They took her away into a further room, and the medical attendance which had been useless in Troy's case was invaluable in Bathsheba's, who fell into a series of fainting-fits that had a serious aspect for a time. The sufferer was got to bed, and Oak, finding from the bulletins that nothing really dreadful was to be apprehended on her score, left the house. Liddy kept watch in Bathsheba's chamber, where she heard her mistress moaning in whispers through the dull slow hours of that wretched night: 'O it is my fault — how can I live! O Heaven, how can I live!'

(第54章)

精神的に死の淵をさ迷い、死んだも同然の八カ月間を過ごした Bathsheba は、心身共に衰弱した状態からかなり回復し、少しずつ人前に出て来るようになった。その頃、これまでずっと影日向なく Bathsheba のために働いてきた Oak は、なかなか彼に心を傾けてくれない彼女に業を煮やし、彼女のもとから去ってアメリカに渡る決心をし、そのことを彼女に告げた。これまで、恋心を胸に秘めて献身的に Bathsheba の仕事を助けて来たが、遂に報いられることなく、彼女のもとを去って行かざるを得ない自分を思い、これからの前途に思いを駆せ、無量の感慨に打たれたに違いない。作者も人力の及ばない人生の哀悲を暗示したのである。一方、Bathsheba も Oak の本心を知らず、秋の間、自分が軽蔑されているという苦しい気持ちと、Oak の示してくれた友情の深さを思い、大きな苦痛に悩み続けていた。そしてクリスマスの翌日、Oak が次年度の雇用契約をしないという正式な通告書を届けてよこした時、Bathsheba は生涯の絶対的権利と思い込んでいた彼の献身的な愛が失われ、唯一無二の友情の絆が絶ち切れようとしており、そして今や彼の力がなくては自分の農場が運営出来ないことをはっきりと認識し、何物かに突き動かされたよ

うに Oak の家に訪ねて行く。

ここで二人の傷付いた者同士が、人生の様々な苦難を乗り越え、やっと共感を抱けるようになったことを知る。しかし、Bathsheba は今までの自分の性格を変えたわけではない。だが二人の愛情は彼女の望んだ激しいロマンティックな恋愛感情ではなく、友情に近いもので本質的な愛情に根ざすものであった。

They spoke very little of their mutual feelings; pretty phrases and warm expressions being probably unnecessary between such tried friends. Theirs was that substantial affection which arises (if any arises at all) when the two who are thrown together begin first by knowing the rougher sides of each other's character, and not the best till further on, the romance growing up in the interstices of a mass of hard prosaic reality. This good-fellowship — *camaraderie* — usually occurring through similarity of pursuits, is unfortunately seldom superadded to love between the sexes, because men and women associate, not in their labours, but in their pleasures merely. Where, however, happy circumstance permits its development, the compounded feeling proves itself to be the only love which is strong as death — that love which many waters cannot quench, nor the floods drown, beside which the passion usually called by the name is evanescent as steam. (第56章)

二人を結び付けるのは根本的には友情である。それは実に危うい奇跡によって男女間に成立し得た「友愛」なのである。この引用文の中にある「男女は仕事ではなく快樂においてのみ結ばれる」という言葉は、この物語の二つの印象的場面である「嵐の中での仕事」と「快樂を求める Troy の剣の舞い」とを読者に思い起こさせる。この二つを経験した Bathsheba の中に生まれた、「友愛」から変わる「愛情」は幾多の困難を経た上での、正に奇跡的な恋愛感情であった。

このような「奇跡的」という印象を読者に抱かせるのは、Boldwood の Troy 射殺事件が、これまで比較的穏やかに進んで来たこの物語の筋の運びとしては、如何にクライマックスを盛り立てるのだとはいえ、いささか強引なものであり、最終的に Oak と Bathsheba の結婚に結び付けようという意図が露骨であるためであろう。またこれよりもっと筋の運び方に滑らかさを欠く箇所がある。なかなか自分に心を向けてくれない Bathsheba に、Oak がアメリカに渡る決心を告げた後、暫くするとその決心をいとも簡単に翻し、彼女との結婚を考えるようになっている。その間の Oak の心の中では、相当深刻な心理的葛藤と変化があったであろうに、その辺の事情は何も述べられていないし、暗示すらない。恰も、ここまで悲劇の積もりで書いて来た作者が、編集者の意向か何かで、ここで止む得ず、喜劇的な体裁を整えるために、結末をハッピーエンドにしたような感じを与える。だが、他にも幾つか細かい点でこのようなあらが見つかるにしても、*Far From the Madding Crowd* は全体的に見れば Hardy の主要作品の中でも中庸を得たものと言えよう。

田園に育ちながらも、高い教育を受け、都会の魅力を充分知ってしまった Bathsheba は、見事

に自然と調和し、自然に適応する Oak の結婚申し込みを拒否する。しかし、現実を直視し、どんな場合にも運命を受け入れ、それを最大限に利用する能力を身に付けている Oak に助けられ、農場経営をすることになる。そして都会の雰囲気を持つ Troy に誘惑され、結婚し捨てられる。数多くの苦難を経験し、Oak の真価を理解出来るようになり結婚する。これは簡単に言うと、「田園的心性」を持ちながらも「都会的心性」に憧れる Bathsheba が、「田園的心性」の具現者 Oak より、「都会的心性」の持ち主 Troy に魅せられるが、その「都会的心性」に裏切られて、困難を乗り越え、人間的成長をした結果、Oak のもとへ戻って行き、「田園的心性」がどうか勝利を収めることが出来たという物語である。更に、脇役として、田園に属する人である Boldwood がいる。田園に根を張る農場主でありながら、都会的趣味の、物腰の柔らかい紳士で威厳を備えている。しかし、精神的には、上辺の平静さとは裏腹に、理性と感情がギリギリの所でバランスを保っているのであり、一旦その均衡が崩れると、感情の虜になる性質である。彼もまた理性と感情の相剋に苦しむ人間であった。田園と都会のいずれに属するかはっきりしない Boldwood は、Bathsheba と違って田園人 Oak による生き方の導きがなかったので、田園的心性を保持し得ず、都会に憧れる Bathsheba と都会人 Troy の双方に散々なぶり者にされ、遂には破滅の人生を歩むことになる。

Hardy は、この *Far From the Madding Crowd* では、変貌して行く農村社会に経済的社会的基盤を置く登場人物を通して、「田園的心性」と「都会的心性」を「野卑」と「洗練」、「無知」と「教育」、「自然」と「文明」などの互いに対立する二つの価値観に置き換えて描いている。実際に Hardy 自身ドーセットシャとロンドンの生活を経験し、変貌して行くウェセックスとロンドンの社会を目の当たりに見て、昔からの習慣と秩序のうちに、静かな田園生活が段々都会の影響を受けて変貌して行く姿に強く心を動かされたことがこの作品に濃く影を落としている。Hardy は後期の作品では Jude や Tess のように故郷を捨てて、田園に基盤を持たない者が、暗い運命によって悲劇に追い込まれる姿を描いている。この *Far From the Madding Crowd* でも悲劇に繋がる、幾多の偶然があるが、それらの悲劇は、Oak のおおらかで気高い愛情によって救われて行くことを描こうとしている。悲観的運命論者 Hardy にも、人生をこのような美しい愛情の場と見る楽天的な一面があったことを示す点で、これは彼の作品中でも独特の位置を占めていると言えよう。

注(1) General Preface to the Wessex Edition of 1912 in *Far From the Madding Crowd: The New Wessex Edition*.

参考書誌

1. *Far From the Madding Crowd*, The New Wessex Edition; The Novels of Thomas Hardy, ed. by P. N. Furbank, 1975.
2. Hardy, Florence Emily, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*, Macmillan, 1983.
3. Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969.
4. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy*, New Direction, 1964.
5. Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975.
6. Hawkins, Desmond, *Hardy Novelist and Poet*, David and Charles, 1976.
7. Hurst, Alan, *Hardy: An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980.
8. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography*, Oxford University Press, 1979.
9. Saxelby, F. Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary*, Greenwood Press, 1980.
10. 鮎沢乗光「トマス・ハーディの小説の世界」開文社出版, 1984.
11. 大沢衛(編)「ハーディ研究」(現代英米作家研究叢書)英宝社, 1976.
12. 大沢衛「黄昏—トマス・ハーディの小説」千城, 1988.
13. 小田稔(訳)「トマス・ハーディの小説における性格描写と運命形象」学書房, 1980.
14. 大沢衛・吉川道夫・藤田繁(編)「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」篠崎書林, 1978.
15. 佐野晃「ハーディ」冬樹社, 1981.
16. 深沢俊(著訳)「T・ハーディ」(講座イギリス文学作品論9)英潮社, 1978.